

《研究ノート》

ルーマニアの文人政治家ディミトリ
エ・カンテミール（一六七三—一七
二三）について

直野 敦

ルーマニアの文人政治家で、十七世紀末から十八世紀初頭にかけて、故国であるモルドヴァ公国、生涯の半ばを過したオスマン・トル帝国の首都イスタンブール、そして最後にはピョートル一世の政治顧問として晩年を送ったロシア、この東地中海からバルカン、そしてユーラシア大陸の内部という三つの地域にわたり文人（作家、歴史家、地理学者、作曲家で演奏家、哲学者等々）、そして政治家（外交官、モルドヴァ公国君主、ロシアの元老院議員等々）としての足跡を残したディミトリエ・カンテミール（一六七三—一七二三）は、ルーマニアの文学史上に大きな地位を占める人物でありながら、これまで外国においては殆ど知られていなかった。しかし、一九七三年はその生誕三百年にあたり、これを機会に、ルーマニアでは十巻に及ぶ全集が刊行中であり、ルーマニア、ソヴェエトではいくつかの研究書も出版され、次第に国際的にもその業績の一端が知られるようになってきている。ディミトリエ・カンテミールの息子

アンテイオーフ・カンテミール（一七〇八—一七四四）は、ロシア古典主義文学の時代における代表的な詩人として知られているが、彼が外交官としてイギリス、フランスに滞在した時代に、父の著作の一部をヨーロッパに紹介するために尽力し、その結果、十八世紀半ばから後半にかけて、『オスマン帝国盛衰史』をはじめとする著作は英、独、仏、ロシア語に訳され、同時代のヨーロッパの知識人たちの東洋趣味に迎えられて、かなり広い層の読者を得ていたことはヨーロッパ文学史上の事実である。ヴォルテールをはじめ、さらに時代を下って、バイロン、ヴィクトール・ユゴーなどが、この文人政治家のトルコ史から素材を得ていることをそれぞれの著作で語っている。

ここでは、広い意味での地中海圏に属しながら、文化的にはその外部から入ってきて東地中海に支配権を確立したオスマン・トルコの政治的・文化的圏内で自己を形成した国際的文人、教養人としてのカンテミールの生涯をたどることによって、十七世紀末から十八世紀初頭のバルカンの知識人たちの運命を考えてみることにしたい。

すでにトルコの支配下に陥って二百年以上を経過したとはいえ、まだギリシア・ビザンツ文化の余映を留めているだけでなく、西ヨーロッパとの政治、経済、文化上の交流がむしろ活潑化していたイスタンブールで、その生涯のうち二十二年を過ごし、トルコ、ペルシア、アラビアなどのオリェント、東方諸国の文化に接しながら、同時に、イタリア（とくにヴェネツィア共和国）出身の教師たちが多かった東方正教会総主教府附属のアカ

デミアで学ぶことによって西ヨーロッパの學術・文化をも吸収したカンテミールのような知識人はこの当時のバルカンにおいては珍しくなかった。カンテミールと同時代人で、彼の最大の政敵となったロムニア(ワラキア)公国のコンスタンティン・ブルンコヴァーヌ(在位一六八八—一七一四)はルーマニアの美術史上にいわゆる「ブルンコヴァーヌ様式」の時代をもたらした程に、學術・文化の興隆に尽力した人物であったが、留学生をイスタンブールやパドヴァに派遣していたし、イスタンブールから多くのギリシア人教師を招いている。また、カンテミールと同じくモルドヴァ出身の文人政治家で、彼より半世紀前にロシアへ亡命して外交官として大きな役割を果たしたスバフアリ・ニコライエ・ミレスク(一六三六—一七〇八)も、イスタンブールの同じアカデミアで人文主義的教養を身につけている。この意味で、イスタンブールは、政治的にトルコの支配下にある諸国の知識人が西ヨーロッパの文化と接触する重要な門戸のひとつであった。ルーマニアにとっては、西欧との文化接触はほぼ三つのルート、すなわち、第一にイスタンブール、第二に種々の政治的・文化的関係の深かったヴェネツィア、とくにそのパドヴァ大学、そして、北方のカトリック教文化圏、ポーランドおよびオーストリアであった。しかし、この時代には、特にイスタンブールの果たした役割が大きかった。デイミトリエ・カンテミールの多面的な教養を培う地盤となったのも他ならぬこのイスタンブールであった。

ところで、デイミトリエ・カンテミールの青年期について述

べる前に、ごく簡単に、彼の家系について触れておかねばならない。なぜなら、彼の出身が、その後の彼の著作に表明された政治観、たとえば、大貴族の権力を抑えて中央集権的な王権の確立をめざす態度などに影響していると一般に認められているからである。

デイミトリエ・カンテミールの父親コンスタンティン・カンテミール(在位一六八五—一九三)は、動乱の時代に卑賤な身から出世して一国の君主になった成り上り者の典型である。しかも、その人間の野心と努力の結果をうなったのではなく、偶然が重なって君主の地位にいわば押しあげられたようなもので、ロシア、ポーランド、オーストリア、トルコという周辺の強国の力関係によって政情が左右されていたこの時代のモルドヴァ公国の悲惨な運命を裏書きするものとも言える。彼は、大地主の圧迫をうけて土地を奪われ、自営農民とほとんど変らない経済状態にあった貧しい小地主の家に生まれている。カンテミールという名前は、父親のトアデルが、当時モルドヴァ地方を荒らしていたタタール人の部族間に有名であった武將の名前をとってつけたもので、本来は洗礼名であり、後に彼がモルドヴァ公の地位についた時に、異教徒の洗礼名を持っていただけには都合が悪いというので、コンスタンティンという新しい洗礼名を新しく採用し、カンテミールが姓として用いられるようになったのである。しかも、このカンテミールという名前は、十四世紀末の中央アジアの覇者チムール大帝(汗・チムール)に由来するものであった。学問・芸術を保護した君主として知られるチ

ムール大帝は、こうして、コンスタンティンの息子と孫の二世代にわたる文人の名を通じて、バルカンとロシアの文学史につながっている。

大地主の圧迫、タタール人の侵入といった不利な条件の中で経済的にも困窮し、一時は馬を飼育し、その売却で生計を支えていたコンスタンティン・カンテミールは隣国のポーランドへ移住して傭兵として働き、武人として名を得て後、モルドヴァへ帰国して次第に宮廷の中で武將として重んじられるようになった。しかし、すでに六三歳の老将であったコンスタンティンが一六八五年にモルドヴァの大貴族たちに推されて君主の地位に据えられたのは、もともと卑しい身分で教養もなかった（彼は自分の名前を署名する以外に読み書きが出来なかった）ので、大貴族たちの意のままになる人物と目されたからである。そして、事実、一六九三年の死にいたるまで、彼は大貴族たちの従順な代弁者として王位に留まったにすぎない。兄のアンテオーフが、人質としてイスタンブールに送られていた三年間に、まだ十歳になったばかりの幼い身ながら、父親のそのような姿を昼夜目にしていたデIMITRIエの心中に、大貴族たちの横暴にたいする憎しみと怒り、強力な中央集権的権力の必要性の認識が刻みこまれたとしても不思議ではない。父親のコンスタンティン公は、自分の教育の不十分さの償いをするかのように、息子たちの教育のためには、最上の条件を準備した。彼は、クレタ島出身の修道僧で、ライプツィヒおよびウィーンに留学した後、ロムニア（ワラキア）公国の首都ブクレシュティで貴族

の子弟たちを教えていたイエレミア・カカヴェラを招いて、デIMITRIエの師とした。デIMITRIエは、このギリシア人教師の下で、ギリシア正教徒としての宗教教育をうけるとともに、ギリシア語と教会スラヴ語を修得した。さらに、ラテン語の勉強もはじめたが、これを本格的に学ぶのは後にイスタンブールへ赴いてからである。

このような中で、兄のアンテオーフと入れかわりに、一六八八年八月に、一五歳になったばかりのデIMITRIエ・カンテミールは人質としてイスタンブールへ送られた。そして、一六九一年に再び故国へ帰り、九三年に父の死を迎えることになる。それまでの約三年間、知識欲に燃える青年デIMITRIエは、ギリシアの出身で、ヴェネツィアのギリシア人学校の教師として働いた後に故国へ帰った人文主義的傾向の神学者テオフィル・コリダレウの指導する総主教府附属のアカデミアで、神学、哲学、ギリシア、ラテンの両古典語、地理学、医学などを、ギリシア人やイタリヤ人教師について熱心に学んだ。同時に、彼はこの地で、西ヨーロッパの諸国の大使たち、とくにフランス大使シャトーヌーフ侯爵とオランダ大使コリエの知遇を得て、ヨーロッパの文化や政治、外交に目を開く機会を与えられた。デIMITRIエ・カンテミールは、もちろん、この時期にトルコ語を修得している。また、この時期からすでに音楽への関心も持ちはじめた。

一六九三年三月の父親の死に際して、まだ十八歳にならなかったデIMITRIエは、大貴族たちによってモルドヴァ公に選出

された。しかし、デイミトリエのモルドヴァ公位への就任は、隣国ロムニア公国の君主コンスタンティン・ブルンコヴァーヌの強力な反対運動が功を奏して、トルコ宮廷による承認を得られなかった。そして、モルドヴァ公としてブルンコヴァーヌの女婿コンスタンティン・ドゥカが任命され、デイミトリエ・カントミールは、一月にも満たない短い在位期間の後に、四月十三日に再び故国を去り、その後の十八年間を再びイスタンブールで送ることになる。

この第二期のイスタンブール滞在の期間に、彼はまずオリエント諸語(トルコ、アラビア、ペルシア語)の習得にはげみ、これらの諸国の歴史を学んだ。そして、トルコ高官たちとの結びつきを利用して、普通、キリスト教徒には入ることを許されていない図書館や資料館に通って、古文書や古いトルコの年代記などに目を通して見る。それが、後に彼の主著のひとつ『オスマン帝国盛衰史』を書く上で役立つことになったのは言うまでもない。同時に、彼はトルコ人たちの日常生活、風俗、習慣、フォークロア、宗教儀式などにも鋭い観察の目を向け、そこから得た知識も彼のトルコ史に取り入れられてこれを興味深いものにしていく。しかし、とくに彼の関心をひいたものは、トルコの音楽と軍事技術であった。彼は、この当時、イスタンブールで太鼓の能手として有名になっていたことが多くの記録に残っているだけでなく、その作曲した歌のうちあるものは現在にいたるまで音楽師たちのレパートリーに加えられ、歌い続けられていると言われる。また、彼が一七〇三年頃にトルコ語で書

いた『音楽理論提要』は、トルコ音楽の楽譜による表記法を示したもので、この種の本としては最初のものであった。

他方、すでに早くからトルコの政治的支配からの祖国の解放を願っていた政治家として、彼は、敵手であるトルコの軍勢力とその軍事技術にたいする観察を怠らなかつた。そして、トルコ軍のいくつかの軍事行動にも参加して実際に戦場でトルコ軍の軍勢力を判断することができたし、一六九六年九月のゼンタの戦闘にも参加して、トルコ軍の敗北の様子を後に詳細に記述している。

この期間に、デイミトリエ・カンテミールは、上記の『音楽理論提要』以外に、ギリシア語とルーマニア語の両方で書かれ、一六九八年にヤシで印刷された哲学書『ディヴァン―世間と賢者との論争』、一七〇〇年に書かれ、神学上ギリシア正教会を弁護するための論争の書、いわゆる『形而上学』として知られる著作、そして、彼が生活のために家庭教師として教えていたトルコ高官の子弟たちのための教科書として書いた『一般論理学提要』とベルギーの哲学者ファン・ヘルモントの自然学を紹介した『一般自然学』を書いている。

これらの著作によって、哲学者、神学者としてデイミトリエ・カンテミールの文名は、イスタンブールを中心とするバルカンの文化圏において拡がり、彼は、トルコの高官や、その他のバルカン諸国の政治家の間に多くの知己を得たばかりでなく、西ヨーロッパ諸国の外交官の間にも多くの友人を得、彼が、一七〇三年から一七〇五年にかけて、コンスタンティン・ブルン

コヴァーヌの策謀のためにトルコの官憲に逮捕されそうになった時、彼に隠れ家を提供したのも、フランス大使フェリオルであった。また、一七〇一年にイスタンブールにロシア大使として赴任してきたピョートル・アンドレーヴィチ・トルストイとの親交を通じて、後にピョートル一世との間の同盟関係が結ばれることになる。しかし、この当時のデIMITRIE・カンテミールは、自分の政治的立場を表面に出さず、彼を陥れようとするコンスタンティン・ブルンコヴァースとも和解をはかっている。

ロシアとトルコとの関係が緊張するにつれて、トルコ宮廷は、親トルコ派で、またロムニア公国の動きをも監視する能力を持った人物をモルドヴァ公に据える必要に迫られて、親トルコ派と目されていたデIMITRIE・カンテミールをこの地位に任命した。こうして、一七一〇年十二月にモルドヴァの首都ヤシに帰ったデIMITRIE・カンテミールは、彼の長年の念願であった中央集権国家の樹立とトルコからの解放という二つの目標を実現するための具体的政策の実現にとりかかった。

一七一年のはじめ、ロシアとトルコの戦争は現実のものとなった。ピョートル一世は、バルカンのキリスト教徒たちを自分の側にひきつけるために、セルビア、ツルナ・ゴラ、ヘルツェゴヴィナ、ロムニア公国、モルドヴァに使者を派遣した。コンスタンティン・ブルンコヴァースとの間には、秘密の条約がすでに結ばれていた。デIMITRIE・カンテミールは、一七一一年四月末にピョートル一世との間に正式に条約を結び、ト

ルコにたいする共同作戦の準備にとりかかった。五月末にロシア軍はモルドヴァへ進撃し、デIMITRIE・カンテミールは、トルコとの戦いを呼びかける布告を出して、ロシア軍と合流した。しかし、七月のブルト河畔のスタニレシュティの戦いで、ロシア、モルドヴァ連合軍は優勢なトルコ軍に敗れ、ピョートル一世はトルコとの間に休戦条約を結ばざるを得なかった。デIMITRIE・カンテミールは、ピョートル一世に従ってロシアへ亡命し、死にいたるまでの十二年間をピョートル一世の政治顧問、元老院議員として過すことになる。しかし、ロシアにおける彼の活動について述べることは別の機会にゆずり、ここでは、ロシアへの亡命前後、彼の発表した、あるいは書いた著作について簡単に触れるにとどめる。

ロシアへ亡命する以前の最後の作品は、一七〇五年頃執筆した動物寓話『絵文字物語』である。これは、恐らくルーマニア語で書かれた最初の散文小説といつてよく、一七〇三年から一七〇五年にかけて頂点に達したブルンコヴァースとカンテミール両公家の争いを鳥の国と獣の国の戦争という形で描いた政治的風刺小説という一面も持っている。現代のルーマニア語と比べて語順なども、ラテン語に影響された複雑な形をとり、作者自身が古典ラテン語やギリシア語をもとに創造した新語を縦横に駆使しているため、ルーマニア人にとっても難解であり、悪文であるという評価が存在する一方では、ルネッサンス期の人文主義、バロック文学、フォークロアなどの様々の要素を優れた芸術形式の中に統一した傑作であるとする研究者もあり、今

日でも評価はまだ定まっていな⁽³⁾い。

ロシアへ亡命してからのデイミトリエ・カンテミールの関心は、トルコおよび自分の祖国であるルーマニアの歴史、地理、民俗の研究に集中され、その過程で次のような著作が書かれている。

一七一六年に、ベルリン学士院の求めに応じて書かれたラテン語による『モルドヴァ地誌』は、十八世紀後半にドイツ語をはじめヨーロッパの主要な言語に訳されて、広く読まれた作品で、モルドヴァの各地方の自然地理、政治生活、民俗、宗教、教育などについて詳細に記述した、ルーマニアにおける最初の科学的な地理学上の著作である。

デイミトリエ・カンテミールの主著ともいべき『オスマン帝国盛衰史』も、同じくラテン語で一七一四年から一六六年にかけて書かれたが、これはもちろん、彼がすでにイスタンブール滞在中にトルコの歴史を書く積りで集めていた史料がもとになっている。それは一三〇〇年から一七一一年にいたる時期を扱っており、第一部は、オスマン帝国の興隆期であるとデイミトリエ・カンテミールの考える一六七二年までを、第二部はそれ以後を衰退期として記述している。第一部は、トルコやビザンツの史料による記述が中心であるが、第二部に入ると、作者自身の直接見聞し、あるいは体験した事実が織りこまれた同時代史という側面が大きく、それがこの史書をユニークなものにしている。この『オスマン帝国盛衰史』は、一七三四―三五年に英訳が、一七四三年に仏訳が、一七四五年に独訳がそれぞれ

出版され、当時のヨーロッパの知識人の間で広い読者層を得た。

一七一六年から一八八一年にかけてやはりラテン語で書かれた自分の父親の伝記『コンスタンティン・カンテミールの生涯』、一七二二年にロシア語で発表された『回教の宗教体系』、死の前年に書かれた、ルーマニア語による著作『ルーマニア・モルドヴァ・ワラキア人の古代からの年代記』が、トルコ史以外の主要な著作であり、ほかに詩、コーカサスの地誌などに関する断片がある。この年代記の冒頭には、彼が利用した参考文献一五四冊がリスト・アップされており、その中には、トルコ、ペルシア、アラビア、セルビア、ルーマニア、ドイツ、フランス、イタリア、ポーランドの各国語で書かれた文献が含まれており、彼の博識と、そして学術的研究の上で手に入れ得る限りの文献を利用して認識をより完全なものにしたいという人文主義者の熱意がうかがわれる。

以上、デイミトリエ・カンテミールの略歴と主要な著作について簡単に触れただけであるが、その個々の著作についての検討、その著作にあらわれた彼の世界観、ルーマニアの文化史上に占める地位などについての考察は今後の課題とせざるを得ない。ここでは、デイミトリエ・カンテミールという人物の生涯を簡単にスケッチしただけで終えることにする。

(1) デイミトリエ・カンテミールの生涯については、ルーマニアで幾つかの著作が発表されている。次のようなものが代表的な伝記である。

Petre P. Panaitescu, Dimitrie Cantemir. Viața și opera, București, 1958

curești, 1973

Constantin Măciuca, Dimitrie Cantemir, București, 1972

(*) Nicolae Stoicescu, Studiu introductiv la Dimitrie

(2) イスタンブールとローマ文化との関係について

Cantemir, Opere complete, Volumul IV, București, 1973, p. 16-19

次の二つの著作が部分的に触れている。

(東京大学助教授)

Alexandru Dușu, Sinteza și originalitatea în cultura română, București, 1972

* 本稿は昭和五十一年度科学研究費補助金(総合研究(A)課題番号一三九〇一〇)による研究成果の一部である。

Romeo Crețu, Prezențe românești la Istanbul, Bu-